資料５

平成２８年度多職種向け研修カリキュラム

【目　　標】 看取り介護に従事しうる事業者を対象に幅広く意識啓発し、暮らしの場における看取りの機運を醸成する。

【人　　数】 １，０００名程度

【形　　式】 講義

【対　　象】 看取り実績の少ない事業者におけるリーダー級職員等（受講後、受講者が各事業者内で伝達研修を実施することを想定）

【プログラム】

番号	大項目	目的・ねらい	小項目	時間
①	イントロダクション	地域包括ケアシステムに関わる東京の現状を理解する	（各自アンケート記入（申込時の実施も検討）） ○課題の背景 ・多死社会の到来、死をめぐる考え方についての日本人における変化、文化（死生観） ・1976年病院死が在宅死を上回って40年、看取り文化が途絶えた中での再構築 ○「第6期東京都高齢者保健福祉計画」や「福祉先進都市・東京の実現に向けた地域包括ケアシステムの在り方検討会議最終報告」などを通じた、東京都の施策の現状	9:30-10:10（40分）
	休憩（5分）			
②	人生の最終段階におけるケアに関する基本的な考え方（前編）	人生の最終段階について、具体的なイメージをもち、ケアの在り方について正しく理解する	○本人の選択を確認し（意思決定支援）、本人・家族の看取りに向けての心構えを促せるアプローチ・・・場の大切さも含め ○自然な死とその生理的な変化とそれに対する支援 ・老衰死をイメージして、死のプロセスの基本を学ぶ。 ・看取り期の軌道のちがいを押さえておく（Lynn＋老衰）。 ○倫理的な問題 ○文化への配慮 ○苦しむ人への援助における課題と対応 ・「傍にいることの支援」（表出、傾聴）	10:15-12:15（120分）
	昼食（60分）			
③	アイスブレーキング	前半の振り返りと後半に向けての動機づけ	事前アンケート結果紹介（看取りで困っていること　など）	13:15-13:30（15分）
④	人生の最終段階におけるケアに関する基本的な考え方（後編）	人生の最終段階について、具体的なイメージをもち、ケアの在り方について正しく理解する	○苦しむ人への援助における課題と対応 ・苦痛をとる症状緩和（ケアに焦点をあてて） ・家族ケア　代理意思決定（施設と在宅） グリーフケア（施設と在宅）	13:30-14:50（80分）
⑤	看取りに関する手順（概要）	看取り期のケアの具体的な手順のイメージをつかむ	○「看取りに関する方針と体制の確立」から「利用者が死亡した後の対応」までの各ステップの、目的・手順・留意点の解説	14:50-15:30（40分）
	休憩（5分）			
⑥	死をとりまく課題と対応	質の高い看取り期のケアを目指すうえで生じやすい課題とその対応方法の概要を知る	○看取り期のケアに取り組む事業者が抱えることの多い課題 ○各課題への対応方法 ○残された家族が行うこと ○死をとりまく社会的な仕組みとその支援 ・医師法20条、民法等 ・救急（東京ルール）と検案	15:35-16:15（40分）
⑦	振り返り	気づきを確認する。	○この研修で学んだこと、現場に持ち帰ること（各自アンケート記入）	16:15-16:45（30分）